

〔研究ノート〕

歌唱活動の減少が子どもに与える 心理的影響について

竹 田 景 子
Keiko Takeda

大阪総合保育大学
児童保育学部

深 田 直 子
Naoko Fukada

大阪総合保育大学
児童保育学部

本稿は、音楽活動の中でも特に能動的な歌唱活動の減少が、子どもにどのような心理的影響を与える可能性があるかについて考察したものである。まず、音楽の効果に関する先行研究の展望を行い、歌唱活動は他の音楽活動に比べても心理的にプラスの効果を与え、その効果は合唱の時にはさらに大きくなるという点についてまとめた。さらに、コロナ禍の影響で歌唱活動を大きく制限された保育・教育現場での音楽活動について、保護者や教員にヒアリングを行った。子どもの時に受ける音楽的な刺激や音楽教育は、彼らの今後の人生を豊かにする上で重要であり、実際に子どもと接している保護者や教員もその重要性を実感していることが窺えた。調査を行った時点では実際に子どもに大きな影響は見られないようだが、長期的には何らかのマイナスの影響が表れる可能性は十分にある。先行研究の展望を行った際にその方法論的な課題についても検討したが、この課題についても踏まえながら今後も調査を重ね、子どもを対象にした具体的な研究を行っていく必要があるだろう。

キーワード：歌唱活動、音楽の効果、保育、教育

I はじめに

音楽は人々が生活していく中で非常に身近なものであり、全く音楽のない状態は考えにくいほどである。音楽を聴くこと、或いは自ら演奏することは、その時々でその人を落ち着かせたり、元気づけたり、様々な心理的効果があるのではないだろうか。好みのジャンルは人それぞれであるが、その人が好む曲でそれを行うと、そのプラスの効果が特に高いであろうことは、多くの人が実感するところだろう。さて、音楽を聴くことや楽器を演奏することももちろん音楽活動ではあるが、自身の体を使い、呼吸を伴い、多くの場合に言葉を伴う「歌」は、音楽活動の中でも特別なものである。しかし、2020年春以降、日本に到来したコロナ禍のために、「歌う」という形で音楽に能動的にかかわる機会が大きく制限された。このような「歌うこと」の欠如は、いかなる心理的影響をもたらすのだろうか。これが本稿の問題意識である。

あらゆる年代、あらゆる場面において、歌は重要な役割を担っている可能性があるが、本稿は教育の場における子どもに焦点を当てて考えていきたい。人は生まれた時にすでにある程度音（音楽）を楽しむ能力を備えているのかもしれない。しかしそれを発達させ、将来大人になってから自分の心身にプラスの効果を与えられる形で

楽しめるようになるためには、成長の過程で音楽的な刺激や教育を受け、経験を重ねていることが必要ではないだろうか。実際、幼稚園教育要領および保育所保育指針の保育内容領域「表現」のねらいにおいては、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とあるように、成長していく中で自らを表現できる様々な手段を身につけていくことが重要だとみなされている。また、小学校学習指導要領の中では目標として「豊かな情操を培う」ことも挙げられている。幅広い人間性を備え、心豊かな人生を送るために、これらのことは欠かせないと位置づけられている。

さらに、今はまだ表面化していない問題が今後現れてくる可能性もある。これから具体的にどのような問題意識をもって子どもに接し、保育・教育を行っていけばよいのかを予想しておくことで、実際に問題が起こった際にいち早くそれをキャッチし、対応していくために役立つこともありえよう。

以下では、まず関連する先行文献の知見を展望し、次にその方法論的な課題を検討する。さらに、保護者や教員を対象にコロナ禍のもとでの音楽教育に関するヒアリングを実施し定性的な仮説発見を行い、今後の本格的な検証のための足掛かりとしたい。

II 音楽のプラスの効果

1 音楽一般の効果

人が他者とコミュニケーションをとる時、あるいは自身の考えや気持ちを整理するために使っているものとして普段意識されているツールは文字であるが、音楽は人間にとってより根源的なコミュニケーションツールであると考えられる（二俣・鈴木（2011））。詩人の谷川俊太郎が河合隼雄らとの対話（2002）の中で述べているように、文字の歴史はただか数千年であるのに対し、語りや歌の歴史はそれよりも相当遡ることができる。身体的な器官という方向から考えてみても、眼は知的な器官であるのに対し、音は鼓膜を通して体自体に共振するため、聴覚は非常に触覚的であると言える。文字を目で追ってその意味を頭に入れる時とは違う感動が、音楽を聴くことで得られることもある（谷川・和合（2010））。楽器の演奏や、発声を伴う歌に関しては、なおさら自身の身体への関与が実感できると考えられる。

音楽を聴取することで気分が落ち着いたりストレスが解消されたりするのを感じる人は多いだろう。そのため多くの人が演奏会へ出かけたり、自宅で好みの音楽を聴いて楽しんだりする。この点については心理的指標を用いた調査が多く行われているが、生理的指標を併用して調査した研究もある。たとえば中嶋・海老原・西条・大平（2013）は、大学生の男女に対して高揚的な音楽（J・シュトラウス「美しく青きドナウ」やクライスラー「愛の喜び」など）を聴取させ、ストレスを負荷した状況からの回復を心理的ストレス指標および生理的ストレス指標（自律神経活動と内分泌活動に関して）で観察した実験研究である。

また、歌を聴くのではなく歌うことで心理的に抱えていた何らかのものを外へ吐き出せることもあるし、また高揚した気分になる場合もあるだろう。そういった効果を意識的・無意識に求めてカラオケに行く人も多いだろうし、合唱団に所属する人が幅広い年齢層で非常に多い理由もこれらの点と関連があると思われる。そして、先に挙げたような音楽の効果を意識的に用いて、音楽療法の現場でもさまざまな実践が行われている（谷口（2000）、稲葉（2007）、伏見・澤田（2014）、田坂・白川・伊藤（2021））。二俣・鈴木（2011）は発達障害児の音楽療法プログラムを提示する著作において、音楽でならば個々の特性に合わせて単純なパターンからより複雑な活動まで、それぞれの対象に最適な刺激を作ることが可能であると述べている。Harris（2019）は音楽の影響力に関する広範な文献を展望した論文の中で、複数の脳内プロセスが自然に関与したり神経系全体へ浸透したり

するといった音楽の「入り組んだ複雑さ」を理由に、他の芸術形態を含む他の活動よりも音楽は多くの成果をもたらすと述べている。

2 歌唱の効果

声を発し何らかの感情を表したり、言語を用いて他者と意思疎通を図ったりすることは、人が社会の中で生きていくために欠かせない。そして、それらに音楽が付けられる（つまり「歌」になる）ことで言葉がより深いものになる、と谷川俊太郎は合唱をテーマにしたワークショップの中で述べている。歌は歌われることによって、分割された正反対の言葉をも一つにする力がある（谷川（2018））。人の感情は非常に繊細で複雑であり、いつも最適な言葉が見つかるとは限らない。文字としてだけの言葉がその時の自分の気持ちに完全に一致しない時でも、音楽が付けられたその言葉を自分で声に出して歌ってみることで、何故かすべてを言い尽くせたような感覚を味わえることがあるのはそういう理由からではないだろうか。

堀内（2017）は関西の大学における保育士と小学校教員養成課程の学生を対象として「歌うことと身体感覚」に関する2回のフォーラムを行い質的データを収集し（講義、フォーカシング（身体的な感覚の変化を扱う心理療法の手法）、事前の気分・感情の質問紙調査および身体感覚の自由記述、歌唱体験（声楽のグループおよび個人レッスン）、事後の質問紙調査、自由記述、インタビューから成る）、参加者の事前事後の変化を質的・量的に分析している。その結果、「歌を歌う」ことを通して自分の感覚と身体がつながる体験ができ、疲労感や抑うつ、不安が下がると述べている。また芳野（2014）は教職課程の大学生を対象に合唱曲「花は咲く」の合唱活動とイメージ画を通したグループ活動を行い、歌唱活動の前後で参加者の情動変化に高い向上率が見られ、特に「解放感」と「積極性」の項目で顕著な効果が示されたことを報告している。

3 合唱の効果

歌唱活動の中でも特に、複数人で歌う合唱での歌唱に焦点を当てると、さらにいろいろな効果が期待される。竹田・平岡（2020）は少年少女合唱団での歌唱活動が自尊感情を高める可能性について触れている。また三橋（2016）は、ベテラン音楽教諭の指導を受けるカトリック系小学校の聖歌隊の活動について参与観察、インタビュー、質問紙調査を行い、子どもが自身の歌唱活動に対して快感情を抱ける場合はその活動を継続する意志が生まれ、さらなる成長につながると述べている。

もっとも、これらの例はもともと歌が好きで、歌唱活動に対して初めからある程度意欲がある集団に対する調査である。したがって合唱することでプラスの影響が現れることは当然かもしれない。換言すれば、より一般的な母集団（たとえば音楽が必修科目である学校の生徒）についても同様のプラスの効果を想定することは、合唱活動の過大評価にあたる可能性がある。しかし、音楽活動が健康と福祉にどのような影響を与えるかを考察したDingleら（2021）は、集団で歌うことは社会的、情緒的、身体的なプロセスを経て様々なプラスの効果をもたらし、その一つとして合唱活動によって社会的な包容力とつながりの感情が高まることを指摘している。事前には特に歌唱に意欲的でなかった一般的な人々も、歌唱活動に参加することによって事後的に歌唱に価値を見出しプラスの影響を受ける、という結果がどの程度一般的に生じるかは重要な論点である。

山崎（2015）は大学生を対象とする歌唱とダンスのワークショップが参加者の感情や志向性に及ぼす影響を質問紙調査によって分析している。参加前後の心理的指標の変化によれば、集団での歌唱やダンスは共感性を高め、自尊感情や肯定的な個人志向性も高めることを報告している。これは個人で歌う時以上に他者に注目して周囲の声と自身の声の関係性に常に意識を向けることが要求され、それが様々な課題を達成することにつながりこの結果に至ったのだと解釈できる。また、音楽活動の中でも特に能動的な活動である歌唱と、身体を動かす活動とが相乗効果を生んだということも考えられる。

4 子どもが音楽教育を受ける意味について

新山王（2016）は、小中高生 300 余名を対象とした音楽教育に関する web アンケートの結果から、子どもにとって音楽は「自己理解や自己実現等のアイデンティティーに関わるツール」であり、「自己表現や他者理解、洞察力等のコミュニケーションに関わるツール」であると述べている。もちろん、音楽だけがこれらのことを可能にする手段ではないであろうが、いろいろな方法を身につけておくことはその後成長していく上でプラスに作用すると思われる。ただし、音楽的な能力（聴くこと、演奏すること）を無理なく習得するためには、その教育を受ける時期も重要であると思われる。（なお、新山王（2016）は音楽や合唱が嫌いであるとか時間の無駄であるといった否定的な回答をした生徒もいることに注意を促している。）

保育の中では特に音楽が重要な役割を果たしている。保育園の指導計画を分析した児島（2004）によれば、まず、保育の中の音楽には心が落ち着いたり、気分転換し

たりストレスを発散したりする癒しの側面がある。次に、「美しい詩や旋律を持つ曲を歌い継ぐことにより、その社会の習俗や文化を受け継ぐ」点と「伝統的な童謡や唱歌を通して、言葉の美しさや、その時々々の自然や人々の心情を体験する」点が挙げられる。この第二の観点に関連して、幼稚園の保育者に対するアンケートから保育における歌唱曲の役割を検討した石川（2004）も、幼児の生活の中では歌うことと遊ぶこと、生活することは分かちがたいものであると述べている。すなわち、幼児期の子どもは音楽を通して、歌う楽しみだけではなく、身近な生き物や身近な人物に対する愛情や、言葉の面白さに対する興味、事物の深い理解をも経験する。

前出の児島（2004）は更に「一人ではなく友達と一緒に演奏することへ関心が広がり、音楽を通して他者とつながることで大きな喜びを得る」と指摘する。また三橋（2017）は、幼稚園の3歳児クラスの一斉歌唱を参与観察した結果をもとに、幼児は一斉歌唱の活動を通して音楽的な表現力を身につけると同時に、幼児同士の一体感の芽生えを経験すると述べている。合唱活動は個人での歌唱よりも達成感を感じやすく、自尊感情を高めることなどにも繋がることには前節でも触れたが、幼児期に集団で歌うことの楽しさを経験しておくことで、この効果はより一層高まると期待される。

西本ら（2020）は、合唱コンクールが生徒の自己肯定感に与える影響を探る中で、体育祭や文化祭なども含む学校行事が減少する近年の傾向のために、生徒が学習場面以外で評価を得ることが難しくなる可能性について指摘している。

Ⅲ 方法論の問題

本稿がこれまで言及した先行文献を含め、音楽や歌唱活動の効果を調査する内外の研究には、活動の事前と事後の状態を比較する方法が多いが、そこには方法論的な課題が少なくないと思われる。Dingleら（2019）は合唱の効果を検証する際の方法論上の課題を多角的に検討している。この点には、経済学や政治学の分野で近年普及が進んでいる統計学的な因果推論（causal inference）も関連してくる（解説にたとえば大久保（2016）がある）。これらを踏まえて、検討の余地がある論点を箇条書きで示すならば以下の通りである。

- 1 他の活動との比較：合唱は他の活動よりも有効性が大きいのだろうか。たとえばチームスポーツの経験やボランティア活動に比べた場合、合唱はより大きな効果を子どもの心理や発達に対して与えるのだろうか。

- 2 費用便益の観点：合唱に何らかのプラスの効果があつたとしても、それは実施に伴う費用に見合う大きさなのだろうか。たとえば、合唱が実り多い体験であるためには力量ある指導者の存在が必要であろうが、そのような指導者を育成したり招聘したりするための金銭的・非金銭的な費用はゼロではない。すると、合唱活動のもたらす実際の便益と費用の差、すなわち純便益はそもそも正であるだろうか。
- 3 効果の持続期間：合唱に何らかのプラスの効果があつたとして、その効果はどれほどの期間持続するのか、あるいはごく短期間に消失してしまうのか。この点を検証するには、長期間にわたる追跡調査が必要になるだろう。もちろんその場合、調査の実施コストは大きくなる。また、子どもの長期的な成長過程に伴う心身の変化と環境の変化は大きいと考えられ、そこにおいて合唱活動の影響という因果関係を識別するのは容易ではないだろう。少なくとも、後述する無作為化比較試験の実施と、追跡調査が必要だと思われる。）¹⁾
- 4 盲検化 (blinding)：合唱に関する調査対象の子どもが、調査者（教師、研究者）の人物を認識している場合、調査者が喜びそうな反応や回答をしがちになる可能性がある。同様の可能性は成人を対象とした対面アンケート調査で古くから指摘されており、調査結果と真実の意見との乖離が問題になる。この観点からは、実験や調査では被験者・参加者と調査分析者は直接接触しないことが望ましい。
- 5 効果の非均一性：必修の音楽の授業における合唱のように強制参加の場合に、平均的にプラスの効果が出たとしても、その内訳は一部の人にはマイナスであるのにそれが他の人たちのプラスによって打ち消されているという可能性はある。あるいは逆に、平均的にはマイナスの効果が出たが一部の人には顕著にプラスの影響を及ぼしている可能性もあろう。したがって事実解明という次元では、そのような効果の非均一性がどの程度存在するか（つまり効果の分布）を把握する必要があるだろう。）²⁾ また規範的には、効果の非均一性が存在する場合に、平均的にプラスの効果が出ていることをもって全体に合唱を強制することは正当化できるか、また逆に平均的にマイナスの効果が出たことをもって合唱を任意参加にしてもよいのか、という論点もありえるだろう。（音楽の必修授業を好まない、また価値を認めない生徒が存在することは前述の通りである。）³⁾
- 6 サンプルの自己選択 (self-selection) の問題：合唱や歌唱活動が任意参加型ならば、音程がうまく取れ

ないことを気にしている人や皆と歌うことに苦手意識や嫌悪感を抱いている人は参加しない可能性は高いだろう。そして参加している人はもともと皆と人前で歌うことが好きな人たちであるとすれば、歌うことがプラスの心理的效果を持つのは当然であろう（だからこそ彼らは合唱に参加している）。そのようなグループを分析した結果からは、合唱が嫌いな子どもを含む必修の音楽科目において合唱教育が有用な効果をもつと主張することはできない。この問題に対処する一つの方法は、いわゆる無作為化比較試験 (Randomized Controlled Trial, RCT) である。参加するかしないかをランダムに決めることによってサンプルの自己選択を排除し、平均的には均質である2つのグループを作り、処置群（合唱を行う）と統制群（合唱を行なわない）とで状態を比較するという方法である。

- 7 事前と事後の比較の欠点：参加者の事前と事後の状態を比較分析する研究は数多い。しかし、ある特定の活動に参加するかしないかに関わらず、時間の経過とともに調査対象者の状態が改善する可能性がある。（たとえば、合唱活動の中・長期的な効果を評価したいとしよう。小学校1年の春に子どもの何らかの発達心理的指標を調査してから合唱に参加し、3年に進級した時に再び同じ指標を調査して比較したところ、平均的に有意に向上していたとする。この向上は合唱活動の影響だと結論づけてよいだろうか。この年齢の子どもの活発な成育を考えれば、合唱に参加しなかったとしても一定の向上が観察されることは大いにありうることである。）この点を考慮して、参加者（処置群）と非参加者（統制群）のそれぞれについて事前と事後を比較する（いわゆる「差の差」を求める）方法が社会科学の因果推論においては標準的である。時間の経過とともに両グループに共通に作用する要因の影響をとり除き、参加の純粋な影響を把握することを目指しているわけである。
- 8 統制群の現実性：因果関係を調べるには、無作為化比較試験 (RCT) による検証が理想であるが、その場合、比較対象である統制群（コントロール群）の状態が現実の状態に近いかどうかには留意が必要である。たとえばコロナ禍の日本では子どもは合唱を自粛した代わりに録音音楽を鑑賞した例が多いとしよう。すると、合唱の効果を調べた先行研究のRCTにおける統制群が受動的な音楽の鑑賞であった場合、その結果は我々の問題設定との関連性が強い。一方、統制群が合唱の代わりに行ったのは完全

な自習（授業時間の過ごし方が子どもに任される）であった先行研究の結果は、（仮に合唱の効果が大きかったとしても）我々の参考にはなりがたいであろう。

- 9 再現性：一般に実験科学においては、ある分析から得られた結論が一般的な知見として妥当であるか否かは、別のデータに対して同様の方法で分析を行い、同様の結果が再現されるかどうかで検証される。一見して画期的な発見（たとえば医療的に極めて有用な能力をもつ細胞の発見）が行なわれたとしても、同様の環境と手法で同様の結果が再現されない場合は、それは科学的な知見として定着することはない。もちろん、このような検証が可能となる前提として、研究の層の厚さが必要となる。合唱の研究がこれまで挙げた方法論上の課題をクリアしたうえで再現性も検証するには、今後研究の層が厚みを増していかななくてはならないだろう。

Ⅳ インタビュー

2021年9月から10月にかけて、幼稚園児から中学生の年齢の子どもを持つ保護者8名と、教育関係者数名（保育園または幼稚園の教諭6名、小学校教諭1名、スクールカウンセラー1名）にインタビュー調査を行った。保護者は、音楽を職業としている人、職業としてではないがかつては趣味として音楽に熱心に関わっていた人たちが主であり、8名のうち7名は阪神間、1名はフランス在住である。また、教育関係者は札幌市と松山市の教諭が各1名で、他は関西圏である。インタビューにあたって本研究の趣旨を説明し、回答の内容を研究に使用することの同意を得た。質問の内容は以下の通りである。

- ・2020年に始まったコロナ禍により学校や園が休業していた、または分散登校や短縮授業など通常とは異なる時間帯になっていた期間
- ・コロナ禍の状況下で制限された活動（主に音楽活動に関連するもの）
- ・保護者・教員として今回の状況ゆえに苦労している点
- ・声を出す機会が減少したことによる子どもへの影響は短期的・長期的にあると思うか

休校あるいは休園となっていた時期は地域や自治体によって差はあるものの、2020年の春から初夏にかけては完全に休業していたケースが多い。その場合にはほぼ全ての保育・教育活動を中断せざるを得なかった。そ

の後、分散登校・登園などの期間を経て、課外活動や様々な行事などを制限しながら教育現場は徐々に再開した。しかし、2021年11月時点でも完全に以前の状態には戻っていない。2020年度はそれ自体が中止になった入学式などの節目の式典や音楽会なども、その時々状況を見ながら少しずつ実施されるようになったが、歌唱を伴うものについてはかなり時間が経った後も制限している所がある（式での園歌・校歌の歌唱は録音したものを流すのみ、音楽会は器楽合奏のみ、など）。またこれらの行事で仮に歌うとしてもマスク着用のままや小声で歌うよう指導したり、密を避けるために保護者の参加が無い、または少人数に限定するなどの対策を取ったりするケースが多い。そのため「達成感を感じづらくなっている」「クラスで一体になる機会の喪失」などの回答が、教育関係者と保護者の両方で見られた。何か目標を設定し、それに向けて努力をし、そして到達できた時の達成感により、取り組んだ物事に対してさらに興味を持ち楽しさも増す、という側面は音楽に限らず非常に重要だろう。そして、この達成感をより感じるためには、ある程度の緊張感をもって人前で歌う経験、そして自分たちの表情も含めて表現することが必要ではないだろうか。

大きな行事以外での普段の園生活においては、何らかの形で歌を継続して歌っている、あるいは一時期中止していたが再開している、という回答がほとんどだった。しかしマスク着用のままであったり、向かい合わずに全員が同じ方向を向いて歌ったり、大きな声にならないように配慮しながら短時間で活動を終えたり、かなり気をつかいながら行っていることが窺えた。「気持ちよく歌えるところまではいっていないと思う」「普段の生活の中で好きな歌を歌うことはあるが、パートに分かれての合唱や表情豊かに歌うことは減るため、喜びや達成感を味わう機会は減ると思う」などの回答があり、Ⅱ章で述べたような歌うことによるプラスの効果は最大限には得られていない可能性がある。また、歌唱活動を行うかどうかはそれぞれの園に最終的な決定が任されるため、その時々状況で、活動ごとに検討を重ねなければならず、その負担はかなり大きい。アンケートでも「とにかく行事ごとにコロナ対策を考えるのが大変」「打ち合わせに時間がかかる」などの回答が非常に多かった。それでも何とか歌唱活動を行っている園が多いということは、それだけ幼児にとって歌唱活動が重要で必要不可欠なものだと考える現場の教員が多いとも言えるだろう。

小・中学校での音楽に関連した行事で、音楽会が中止や形式を変更しての実施となったことについては前述した。合唱コンクールなどの実施もかなり難しく、この点に関して「合唱コンクールは思い出に残る大きなイベン

トだから、そういう機会が減ると悲しい」「メンタル面を鍛えるような機会が減る」といった保護者の回答があった。音楽の授業内では、鍵盤ハーモニカやリコーダーはマスクを外さなくてはならないので中止か、指使いのみの指導を行っていたところが多い。歌唱は2020年前半にはほぼ行われず、代わりに鑑賞の時間が増加したようである。少しずつ再開されていったが、「席に座ってマスクを着用したまま歌う。大きい声を出さずに口ずさんで歌うよう指導」「歌はマスクありで距離をとって実施」という回答にもあるように、幼児の場合と同様かなり制約がある中での実施となっている。

歌唱活動が減少することによる子どもへの影響を尋ねた項目では、「短期的には感じない」「小さい子（に対する影響）はあまり分からない」などの回答が大部分を占めており、インタビュー時点では目立った変化は感じられていないようである。園では感染対策を取って何らかの形で歌唱を継続しているので大きな影響はないだろう、という趣旨の回答も複数見られた。コロナ禍になってから入園・入学した園児や小学校低学年の子どもは「そんなものか、という感じで慣れてしまっている」「いろいろな意味で現状が学校生活のスタンダードとなっている」という回答にもあるように、多くの場面で歌が歌われていたという以前の状況を経験していないためストレスなどのマイナスの影響を感じにくいと捉えることもできる。

一方、長期的には何らかのマイナスの影響が出るだろうという回答が大半を占めた。その中で保護者・教員共に、歌唱活動の減少によって音楽の楽しさを知る機会が減ると予想する回答が最も多く見られた。園や学校が再開した後、音楽的活動や授業は鑑賞などから徐々に行われてきた。だが、歌唱は他の音楽的活動に比べてより能動的に音楽と向かい合うために体験として強く印象に残り、楽しいと感じられやすくなる。「歌が楽しいとか好きだと思うきっかけは減るだろう」「将来的に歌唱に興味を持つ（得意だと思える）子どもが少なくなる可能性がある」「もともと歌にそれほど興味のない子どもは、さらに好きになる機会が失われるだろうという不安」「一人で聴くだけ、歌うだけではなく、大好きな友達や先生と聞いたり歌ったりするからこそ楽しさを感じ、好きになることに繋がるのだと思う」といった回答からは、Ⅱ章で述べた歌唱のプラスの効果を、日常的に子どもと接している大人たちが実感として持っていることが窺える。

音楽は自己表現の手段の一つであり、それを獲得するためには成長の過程で音楽的刺激や教育を受けることが重要だということについては前述した。この点を危惧し

た回答には「歌唱指導がないので、上手にコントロールして声を出す機会が失われる」「今後、人前で歌うことに対して抵抗を抱く子どもは出てくるだろう」というものがあった。また、歌唱を含めて広い意味で「声を出す・声を合わせる」機会が失われたことで、「長期的には自己主張が消極的になるのではないか」「能動的活動の意欲の減少や、他者の気持ちを察する能力の減少」といった点を心配する声も聞かれた。

V おわりに

今回は音楽の、特に歌うことの効果や子どもが音楽の教育を受ける意味について改めてまとめ、その上で保護者や現場で保育や教育に携わっている教員の方々にお話を伺った。私達が初めて直面せざるを得なかった今の状況に、手探りで試行錯誤しながら、しかし目の前にいる子どもが可能な限りのびのびと成長できるように腐心されている様子が強く感じられた。

今回の保護者へのインタビューは、筆者の比較的近い範囲で協力をお願いしたため、音楽との心理的距離がかなり近い方々だと思われる。そのため、子どもの音楽活動の制限による影響を、平均的な保護者たちよりも強く感じている可能性はある。また、教育現場の方々については、幼児を対象としている教員の割合が高くなったので、小学校の現状を十分にくみ取ることができなかったかもしれない。今後同様の聞き取り調査を行う場合は、可能な限り偏りのない対象で実施することが望ましいだろう。加えて、記憶は過去に遡るほど曖昧になっているのが当然であるので、著しく歌唱活動が制限された2020年前半の現場の状況を詳細に知るためには聞き取りは急務であろうし、継続的な変化を知るためには長期間の間隔を置かず複数回の調査を行うことが必要だろう。

コロナ禍となり教育機関も一時休業せざるを得ない所も多くあった。再開しても特に歌唱活動に関してはかなり制限が厳しく、以前の状態に完全に戻るのにはまだ時間がかかると思われる。こういった状況の長期化によって、子どもへのマイナスの心理的影響が実際に現れる可能性もある。音楽が好きかそうでないか、音楽を自己表現の手段として用いることができるかどうか、等の点についての客観的評価は簡単ではないだろうし、自己主張や他者の気持ちを察する能力等については音楽活動以外の様々な要素も複雑に関係していると思われるが、丁寧な聞き取り調査を継続する中で一層問題点を明確にし、Ⅲ章で述べた方法論の問題も踏まえながら、実際の子どもの対象にした定性的・定量的な研究を今後行っていく

必要があると考える。

注

- 1) このような長期的調査の例として、米国の貧困家庭の児童への介入実験調査であるペリー就学前プロジェクトとアベセタリアン・プロジェクトが挙げられる。同調査はシカゴ大学のノーベル賞経済学者ジェームズ・J・ヘックマンが分析して有名になった (Cf. ヘックマン (2015))。
- 2) 西本ら (2020) は、沖縄県の同一地区内で学校行事として合唱コンクールを開催する中学校の生徒 (処置群) と開催しない中学校の生徒 (統制群) を対象に、開催の事前と事後に質問紙調査を行い、自己肯定意識の変化を比較している。その結果、平均的には開催前後で自己肯定感には有意な変化がなかった。一方、合唱コンクールへの熱心度で標本をグループ分けすると、熱心に取り組んだグループでは肯定感が増加し、そうでないグループではむしろ低下したことを見出した。
- 3) これに対して、「児童生徒が必ずしも好まない科目は音楽だけではない (たとえば数学)、好悪に関わらず必要な科目を学ばせるところに教育の意義がある」などと主張することもできようが、その主張に説得力をもたせるには、やはりその科目を好まない生徒にも履修させるだけの価値が存在することを客観的に示すことが必要であろう。

文献

- Dingle G.A. et al. (2019). Agenda for Best Practice Research in Group Singing Health and Wellbeing. Music & Science (in press).
- Dingle, G.A. et al. (2021). How Do Music Activities Affect Health and Well-Being? A Scoping Review of Studies Examining Psychosocial Mechanisms. Frontiers in Psychology, 12.
- 伏見千悦子・澤田悦子 (2014). 障がいのある子ども達の音楽あそびの実践－地域における課外活動支援の取り組み－ 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 6, 137-143.
- 二俣泉・鈴木涼子 (2011). 音楽で育てよう 春秋社
- Harris, L.J. (2019). Does Music Matter? A Look at the Issues and the Evidence. Developmental Neuropsychology, 44, 104-145.
- ヘックマン, ジェームズ, J. (2015). 「幼児教育」が人生を変える、これだけの証拠. 東洋経済オンライン. 2015. 7. 2 <https://toyokeizai.net/articles/-/73546> (2021年10月30日)
- 堀内歌子 (2017). 歌唱時の「感じたものを表現する」ことに関する一考察－身体感覚を生かす音楽教育に向けて－ 心理社会的支援研究, 8, 33-46.
- 稲葉千賀 (2007). 音楽療法の悲嘆援助に関するケーススタディ－歌唱活動を通じた悲しみの表現と悲嘆の心理過程－ 尚美学園大学芸術情報研究, 12, 1-7.
- 石川眞佐江 (2004). 保育における歌唱曲の役割－保育者による歌唱曲の使用状況の調査をもとに－ 日本保育学会大会発

表論文集, 57, 486-487.

- 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹 (2002). 声の力 岩波書店
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針
- 児島輝美 (2004). 音楽のある園生活を考える－指導計画にみられる子供と音楽－ 日本保育学会大会論文集, 57, 182-183.
- 三橋さゆり (2016). 児童の歌唱活動における継続と省察の関連－歌唱活動に対する児童の気持ちや価値観の変化に関する分析を通して－ 音楽表現学, 14(0), 1-18.
- 三橋さゆり (2017). 幼児の一斉歌唱における教育的効果に関する考察 学校音楽教育実践論集, 1(0), 112-113.
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領
- 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領
- 中嶋麻葉・海老原直邦・西条寿夫・大平英樹 (2013). 音楽のストレス解消効果について－心理的指標および生理的ストレス指標による検討－ 人間環境学研究, 11-1, 19-25.
- 西本裕樹・崎山弥生・亀川怜・服部洋一 (2020). 合唱コンクールが中学生の自己肯定感に与える効果 琉球大学教育学部紀要, 96, 29-34.
- 大久保将貴 (2016). 因果推論の理論と分析手法－年報人間科学 (大阪大学), 37, 35-49.
- 新山王政和 (2016). 「音楽についてこう考える、こう言いたい」学習者アンケート Web 調査の分析－子供にとって音楽は「アイデンティティーやコミュニケーション」のツール 音楽教育実践ジャーナル, 13-2, 8-19.
- 竹田景子・平岡清志 (2020). 音楽鑑賞と自尊感情 (3)－少年少女合唱団の合唱前・後の自尊感情の変容－ 姫路獨協大学教職課程研究, 30, 15-26.
- 谷口高士 (2000). 音は心の中で音楽になる－音楽心理学への招待－ 北大路書房
- 谷川俊太郎 (2018) (中地雅之／編). 声が世界を抱きしめます－谷川俊太郎 詩・音楽・合唱を語る－ 東京学芸大学出版会
- 谷川俊太郎・和合亮一 (2010). にほんごの本 青土社
- 田坂裕子・白川ゆう子・伊藤啓子 (2021). 音楽指導場面にみられた重複障害児の社会的相互交渉での歌いかけの影響 神奈川大学心理・教育研究論集, 49, 109-119.
- 山崎晃男 (2015). 集団による歌唱・ダンス活動と向社会的特性との関係及びその教育的意義について 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 5, 35-42.
- 芳野道子 (2014). 音楽による心理教育的効果－歌唱活動からのアプローチ－ 武蔵野短期大学研究紀要, 28, 231-243.

謝辞

本稿の作成にあたって、インタビューに快くご協力くださった皆様に心から感謝申しあげます。

付記

本稿に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

